

## 中国行

——烏魯木齊・吐魯番・敦煌・天水——

東山 セツ子

1985年8月1日～27日、我が家は旅先に在った。つまり家族旅行。幾つかの目的の中、最初の仕事は中国敦煌吐魯番学術討論会参加。中国人百数十名と外国人数名。日本からは三名プラス私。国際会議の主催を学会が自ら担当するのは今回が初めてのこと。研究発表会場では、四角い文字が横書きでぎっしり詰まっている参考資料を眺めているばかりであった。そこで、一人で街へ出てみることにした。会場兼宿舎である崑崙賓館から市バスを使って鉱産陳列所や繁華街を歩いた。露店ではトマトや果物を幾何学模様の形に積み上げて売る。羊肉は長さ約40cmの金串に刺して炭火で焼き、たれと赤いカラシを付ける。シンカバブと呼び、ホテルのメニューにもある。全く臭味が無い。肉屋では大きな羊肉の塊を天井や釣り台からぶら下げて、巾広い包丁で大きく切り取って秤にかける。牙科とあるのは歯医者さん。ウィグルの人は彫りの深い顔、つばの無い小さな帽子を被る。女性はスカーフのことも多く、長袖・長い裾のワンピースにベルト無しで、ゆったりとした服装。看板やバス停には漢字とウィグル文字。漢字でも発音は不明、バス路線も幾つかある。それでも何とか、ホテルに帰着。幼い頃の一人歩きのような感じ。

ウルムチは気温-16℃(1月)～21℃(7月)、降水量年292mmの乾燥地。朝の洗濯物が部屋の中で昼には乾く。数日間、私は洗濯機になっていた。この洗濯機、街中へ出るだけでなく読み書きもする。清書中の原稿の隣にあった別の原稿、漢字だけの跋文は和文に変身し、数日後には日本の出版社へ(潮文庫「敦煌行」p.256～262)。

学会の一日巡検では、天山山脈中の湖、天池へのバス旅行。三食昼寝付きのホテル住まいも約1週間で幕。次の巡検はトルファン行き。巡検はどちらも無料。ホテル代の割引きあり、学会後、中国国内では個人旅行の交通費が2割引きとのこと。一方、発表する論文150部を学会へ納める。

ウルムチを出て南下すると荒地の中にバス停「塩湖」。幾つかの白い湖を後に天山山脈を越えると吐魯番盆地。坎尔井(地下水路)の列が交錯する砂漠の中、縦

穴が四方に点々と続く。行先にはただ大地が広がるのみ。やっと辿り着いた集落で水の到着を確認。集落から、天山は遥か彼方に。

吐魯番の街に着いて、名産のブドウの棚の下、幾つものお盆にはスイカとハミウリが山と出される。気温39℃とのこと。交河故城では42℃の熱風が吹きつける。暑い汗が汗だくではない。ただひたすら熱いのだ。泥の壁、同じ泥の道、ここが大通りだと聞かされてもピンと来ない城跡。断崖の下は樹木等が青々と河の両岸に続くが、故城の方は砂が飛ばされて、大地は固い。翌午前中、高昌故城へ。38℃、微風、日陰は涼しい。ここは僧玄奘がしばらく滞在し、般若経を講義したのだが、インドからの帰途に立ち寄った時、高昌国はすでに滅んでいたとか。日下し練瓦の建物はほとんど壊され、今は少ない。次に行ったスターナ古墳は砂漠の下。階段を下りると地下室。壁面には彩色画。地上には出入口のみ。南東の方向へ約10kmでベゼクリク石窟寺院。深く刻まれた大きな谷の側壁に多くの窟が穿かれている。付近に集落や畑は無い。

火焰山を背景に、焼くや生身の身も焦がれつつ記念撮影。火焰山は広さ約(100×10)km<sup>2</sup>、高さは約600m。葡萄溝では小休止、ブドウ棚の下でスイカとブドウ。夕方、吐魯番駅で学会の一行と別れ、列車を待つこと5時間半。柳園からは敦煌文物研究院の方々を迎えるバスに乗り約2時間半、駱駝の放牧や駱駝草を眺めつつ敦煌県城へ。

敦煌では全面的に研究院のお世話になる。通勤バスの利用、食堂での昼食、莫高窟の上方の砂漠への同行等々。野帳には、次第に仏像の図がふえていく。団体と合流した数日間の中の半日は陽関へ。見渡す限りの砂漠には道と電柱の列が続く。空港近くでは、午前2時、林の近くに北斗七星が見られたのは驚異。敦煌から蘭州へ一日遅れて飛び、蘭州からの列車は夜中の12時に天水着。数日後は北京へ。北京や烏魯木齊空港を初め、どこでも現地の人々に迎えられ、次の切符を手に入れてもらったので旅は続けられた。今春も西へ行く予定。

(8回生)